
 ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況（2009年7月～8月）

気 象 庁



図 1. 2009年7月～8月に目立った活動があった火山

秋田駒ヶ岳 (39°45'40"N, 140°47'58"E)

8月27日に女岳東北東斜面に植生が枯死している領域が存在するとの情報が寄せられた。翌28日に行った現地調査では、女岳東北東斜面に長径約12m、短径約5mの楕円状の範囲で植生の枯死域が確認され、高さ5m程度の弱い噴気が認められた。地表面温度分布では、枯死域に対応した地熱の高まりが確認されたほか、その上部でも地熱の高まりが認められた。

従来から認められている女岳山頂北部の地熱域の地表面温度分布に、特段の変化はなかった。

地震活動は低調な状態で推移している。

浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

山頂火口からの白色の噴煙量は4月以来大きな変化はなく、噴煙高度は火口縁上100～300mで推移した。

火山性地震は、山頂火口直下のごく浅い所で発生したと推定されるBL型地震のやや多い状態が続き、振幅の小さな火山性微動もやや多い状態で推移した。また、2

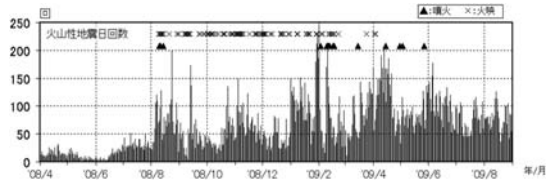


図 2. 浅間山 火山性地震の日回数（2008年4月1日～2009年8月31日）

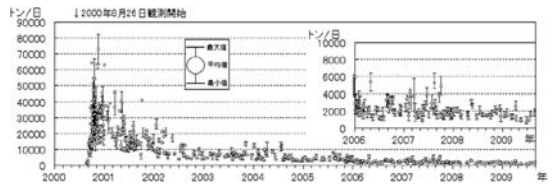


図 3. 三宅島 火山ガス（二酸化硫黄）放出量の変化（2000年8月26日～2009年8月31日）

月2日の小規模噴火発生前にみられたBH型地震の増加はなかった。傾斜計では、火口直下浅部へのマグマ上昇を示す変化は観測されていない。

COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中1回実施）では、一日あたり300～500トンと3月以降放出量は減少しているが、2008年7月以前と比べて多い状態が続いている。夜間に高感度カメラで時々みられていた微弱な火映は、今期間は観測されなかった。

山体周辺のGPS連続観測では、一部の基線で2008年7月初め頃からわずかに伸びる傾向が、7月頃から鈍化している。

三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

山頂火口からの噴煙量はやや多い状態が続き、噴煙高度は火口縁上200mで推移した。

島内で実施した、COMPUSSを用いたトラバース法による火山ガス観測（期間中3回実施）では、二酸化硫黄放出量は一日あたり800～2,200トンと、依然として多量の火山ガス放出が続いた。また、三宅村の火山ガス濃度観測では、山麓で高濃度の二酸化硫黄が時々観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震（約3～10Hzが卓越する地震）で、高周波地震（約10Hz

以上が卓越する地震)も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。また、火山性微動も時々観測された。

全磁力観測では、火山活動とみられる有意な変化は観測されなかった。

GPS 連続観測では、山体浅部の収縮がわずかながら継続している。

硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

7月27日に海上自衛隊の協力を得て行った上空からの観測では、前回(2008年7月29日)と比べて、島内の噴気、地熱等の状況に大きな変化は認められなかった。

また、島西部の阿蘇台陥没孔では、前回(2009年1月20~22日)同様、熱水の水位は低い状態で、孔の中ではごく小規模な泥混じりの熱湯の噴出が時々みられた。

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過した。国土地理院の観測によると、2006年8月以降見られている島全体が隆起する地殻変動は5月中旬頃から、その傾向が鈍化している。

福德岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

7月27日に海上自衛隊の協力を得て行った上空からの観測では、福德岡ノ場付近の海面に火山活動に伴うものとみられる変色水が確認された。福德岡ノ場付近では、これまでも長期にわたり、火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口では、南側火口壁の噴気孔からごく微量の火山灰噴出が時々確認された。夜間に行った現地調査では、同噴気孔から火災現象が時々確認された。

中岳第一火口の湯だまりの量は9割で経過し、表面温度にも大きな変化はなかった。

孤立型微動は一日あたり120~160回程度とやや多い状態で推移した。

COMPASS を用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中2回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり300~400トンと少ない状態で経過した。

8月4日に行った南阿蘇村吉岡(中岳第一火口から西南西約6km)の現地調査では、2007年5月から閉塞していたB1噴気孔の東側約2mに、新たな噴気孔が形成されているのを確認した。新噴気孔の大きさは長径約3m、短径約1.5mで、噴気の高さは約20mであった。

桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、7月から8月にかけて噴火が138回発

生し、そのうち108回が爆発的噴火であった。これらの爆発的噴火で、大きな噴石が最長で4合目(昭和火口から800~1,300m)まで達したほか、8月6日09時52分の爆発的噴火では、火砕流が火口周辺にとどまる程度(昭和火口の東側約200mの範囲)に流下し、10日10時36分の噴火では、昭和火口の周辺(東側約500mの範囲)に流下するなどした。また、7月18日16時08分と19日00時28分の爆発的噴火では、火口から南東約3kmに設置している空振計で100Paを超える空振を観測した。

8月3日、大隅河川国道事務所の協力により京都大学と共同で行った上空からの観測では、昭和火口の形状が、前回の観測(2009年4月10日)と比べて、やや大きくなっていった。また、昭和火口の南東側には爆発的噴火で噴出したとみられる噴石を複数確認した。

南岳山頂火口では、噴火が2回発生した。

COMPASS を用いたトラバース法による火山ガス観測(期間中1回実施)では、二酸化硫黄放出量は一日あたり1,400トンと、前回(2009年6月22日、一日あたり800トン)と比べて増加した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過した。

国土地理院のGPS連続観測では、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。

薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや高まった状態が続いており、噴煙高度は火口縁上概ね100~300mで推移した。8月24日に、第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、前回の観測(2009年6月16日)と比べて、硫黄岳山頂火口及びその周辺の状況に大きな変化はなかった。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くがB型地震で、A型地震も時々発生した。また、火山性微動は観測されなかった。

口永良部島 (30°26'36"N, 130°13'02"E (古岳))

遠望カメラ(新岳火口の北西約3km)による観測では、新岳火口から噴煙が時々確認された。

8月20日に行った現地調査では、前回の観測(2009年5月14日)と比べて、新岳火口及びその周辺に特段の変化はなく、新岳南側火口壁で、引き続き噴煙活動が確認された。また、8月24日に第十管区海上保安本部が実施した上空からの観測では、前回の観測(2009年6月16日)と比べて新岳火口及びその周辺の状況に大きな変化はなかった。

火山性地震は少なく、火山性微動も少ない状態で推移した。

GPS 連続観測では、2008 年 9 月以降新岳火口浅部の膨張を示す変化が観測されていたが、2009 年 2 月以降鈍化し、6 月に入り認められなくなった。

諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

小規模な噴火が断続的に発生し、そのうち爆発的噴火は 32 回発生した。8 月 27 日 22 時 00 分に、噴火に伴う振幅の大きな火山性微動が発生した。翌 28 日に京都大学及び気象庁機動調査班 (JMA-MOT) が鹿児島県の協力により行った上空からの観測では、御岳火口の北西側に多量の火山灰が堆積しているのを確認した。地震活動は、B 型地震がやや多い状態で推移した。

(お知らせ) 最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm

(文責：気象庁地震火山部火山課 飯野英樹)

○特任助教公募

【東工大地惑 新学術領域「地殻流体」】

1. 募集人員：特任助教，1 名
任期，2014 年 3 月 31 日まで
専門分野，地殻流体 (実験)
- (1) 高温高压実験に基づいて沈み込み変動に果たす地殻流体の役割を研究する方。鉱物物性，マグマ学，火山学のいずれかに関係する研究者を歓迎します。なお，採用後は地球惑星科学専攻の一員として関連分野の大学院・学教育にも携わって頂きます。
- (2) 実験装置・分析装置の維持運用に積極的に取り組んで頂ける方。
2. 応募資格：博士の学位を有する者
3. 着任時期：採用決定後，できるだけ早い時期を希望します。
4. 提出書類：
 - (1) 履歴書
 - (2) 研究・教育に関する実績と今後の計画・抱負 (A4 一枚以内)
 - (3) 研究業績リスト
 - A. 査読付き原著論文
 - B. プロシーディングス，総説など
 - C. 著書，その他特記すべき出版物

(注) A, B, C いずれも和文のものは和文名で表記すること。

- (4) 主な原著論文の別刷 (コピー可) 2 編以内
- (5) 応募者について参考意見をうかがえる方 (2 名) の氏名および連絡先 (所属, E-mail)
- (6) 応募書類は返却いたしません。こちらで責任を持って処分させていただきます。
5. 応募締め切り：2009 年 9 月 17 日 (木) 必着「宅配便」にて送付願います。
6. 応募書類の送付先：

〒152-8551 東京都目黒区大岡山 2-12-1
東京工業大学 大学院理工学研究科
地球惑星科学専攻 (I2-20)
石川台 2 号館 209 号室気付 高橋栄一
Tel : 03-5734-2339
7. 問い合わせ先：高橋栄一
E-mail : etakahas@geo.titech.ac.jp
Tel : 03-5734-2338
8. 新学術領域研究「地殻流体」の詳細は次のホームページをご覧ください。
<http://www.geofluids.titech.ac.jp/>
地球惑星科学専攻に関しては次のホームページをご覧ください。
<http://www.geo.titech.ac.jp>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 8 月 25 日送信しました)

○教員公募

【東京大学地震研究所】

1. 公募人員：助教 1 名
2. 所 属：アウトリーチ推進室
3. 公募分野：地震火山情報学分野
当研究所における地震・火山研究に関した国内外の広報・アウトリーチ活動を主導的に推進するとともに，同活動の学術的裏付けとして地震火山情報学の研究を行い，大学院教育にも携わる。
4. 応募資格：博士の学位を有する方。
5. 採用時期：決定次第できるだけ早い時期
6. 任期について：

本研究所の教員の任期に関する内規により，満 55 歳を越えることとなる者に 5 年以内の任期を定める。再任は本研究所教授会の承認を得た場合 1 回限り可。
7. 提出書類：
 - (1) 履歴書 (市販用紙可)
 - (2) 業績リスト (論文の場合は査読の有無を区別すること。)
 - (3) 主要な業績の複写 3 編程度
 - (4) これまでの業績の概要 (A4 用紙 2 枚程度)